

中学校で音楽の教師となり、自分の中学校時代と何一つ変わらない音楽の授業に違和感を感じていた。そんな時にシェイファーの「教室の犀」に出会い、大いに胸を躍らせたものだった。数年後「GEATIVE MUSIC EDUCATION (THINKING EAR はこれにさらに数編の実践を加えたもの)」を入手し、読み始めたことがこの翻訳のきっかけである。長崎に住んでいたこともあり、THRENODY という作品に出合って、2005年に広島でカナダの学生たちによる演奏会の開催の実現にこぎつけることもできた。エリザベト音楽大学の全面的なご支援を頂けたことにも心から感謝している。

この頃ジョン コール先生に出会ったことで翻訳作業が現実のものとなった。英語には全くと言っていいほどの私が 500 ページを超える英文に立ち向かえたのはすべて先生の忍耐の結果と言っても過言ではない。おまけに音楽的な知識がほとんどないに等しいのだからただ感謝あるのみである。

また、シェイファー氏が「COMPOSER IN THE CLASSROOM」の翻訳をしたいと申し出た私に「THINKING EAR」全部を翻訳しなさいと許可を頂いたことも大きな励みとなった。

読むたびに音楽との関わり方について新たな発見がある。この本が書かれてからもうすでに長い時間が経過している。ここで提唱されていたことが社会の中に浸透していくことに気づくのも、この翻訳を続けてきたことの喜びのひとつである。